

## 発表要旨

### 1. 二村淳子(美術・白百合女子大学)

「1931年パリ植民地博覧会・インドシナ館について——ヴィクトール・タルデューの報告書を中心に——」

1931年のパリの植民地博覧会にて、「藝術部門(section des arts)」を担当した機関は、フランス極東学院であった。一方、インドシナ美術学校は、「公益(section d'intérêt social)」部門としての参加であった。学生たちの作品は、「インドシナ館」ことアンコールワット寺院館の一階にて展示が行われた。では、学生の作品は、どのような目的で展示されたのだろうか。初代校長ヴィクトール・タルデューが書いた博覧会報告書〈L'École des Beaux-arts de l'Indo-Chine〉から、あるいは、インドシナ公教育総局の報告書〈Trois écoles d'art de l'Indochine〉からは、どのような事実が読めるだろうか。

実は、インドシナ美術学校の展覧会は、技術や美術ではなく、教育——フランスによる教育——が焦点となっていた。では、総督府がこの展覧会を通してフランス本国、あるいは他のフランス植民地に示したかった「教育」とはどのようなものであったのだろうか。

### 2. 栗原ふみ(美術・福岡アジア美術館)

「ブイ・シュアン・ファイ作《チェオの役者》主題作品をめぐって—「モダン」と「ナショナル」の狭間で—

ブイ・シュアン・ファイ (Bùi Xuân Phái, 1920~1988) は、「ベトナム美術のモダン・マスター」として名高い画家である。ファイの画業とその評価は、ベトナム激動の近代史における政治体制や社会状況の変化と密接に結びついている。1960年代以降中央から冷遇されていたファイが、1980年代に入ると「多くの画家が党の方針に追随した状況下で、自らの「モダン」を追い求めた孤高の芸術家」として、なかば伝説のように神格化されていったことは、そのことをよく表している。そしてそのようなファイ評価において欠かせないのが、「モダン」であるだけでなく、「伝統」や「愛国」など「ナショナル」な要素を含んでいるという観点であった。

本発表では、「モダン」と「ナショナル」をキーワードに、《ハノイの通り》と並んでファイの代表的な画題とされている《チェオの役者》主題作品を中心として、ファイ評価の言説を解きほぐしていくことで、ベトナムが自らの近代美術史をどのように定義し、構築してきたのかの一端を明らかにしたい。

3. ディクディク・サヤディクムラツ(美術・バンドン工科大学)  
孔井美幸(美術・無所属)

「EXPO' 70 大阪万博インドネシア館の現代美術展」

発表者は、1970年大阪万博インドネシア館について調査を行った。本発表では調査結果をもとに、同館での現代美術を中心とした美術展示について明らかにし、その意義について考察する。このパヴィリオンの第4室には、現存作家の作品が並べられたが、それは対外的には最初のインドネシア現代美術展となったと思われる。同館の美術展示は、政府と国立バンドン工科大学、そしてデザイン・センターによって緻密に構成されたもので、会場を訪れた世界中の観客に、インドネシアの伝統芸術と現代美術が融合した芸術的空間を見せることが意図されていた。

本発表では、大阪万博前のインドネシアの美術動向をふまえつつ、出品作品とその作家を概観し、インドネシア館における現代美術展が、インドネシア現代美術の黎明を告げる重要なイベントであったことを示したい。